

スポーツ中継番組

テレビでスポーツの中継番組をみる機会が多くなった。コロナ禍で在宅の時間が増えたからなのだろう。スポーツは何であれ、始まりがあり勝負がついて終了となる。当たり前のことだが、最近はずっと使えるようになったからだろうか、中継の途中に何度も何度も過去のビデオが挿入される。例えば、一人のバッターが球を狙い打つシーンで、前回の打席のビデオが流されるなんてしょっちゅうのことである。前の試合、今年の試合なども時に映し出される。試合は前へ前へと進んでいくのに、テレビをみている人間は過去の映像をみせられて、感覚としては後ろに後ろにと引き戻されてしまう。この中継シーンなどすぐ後でまたビデオに出てくると思うと、もうそこに先のみえないドラマをみようなどとは思わなくなってしまうのではないか。制作者はそもそもは考えていないようだ。丁寧にビデオ画像を繰り返して、ゲームをドラマとしてではなく「分析」の対象にしてしまっている。

もう一つ気になることがある。例えば大相撲だ

わたなべとしお

渡辺利夫 (公益財団法人オイスカ会長)

一九三九年、山梨県生まれ。七〇年、慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程修了。経済学博士。筑波大学・東京工業大学教授、拓殖大学学長、総長、学事顧問などを歴任(二〇二〇年十二月、退任)。二〇一七年六月より現職。

が、多くの場所にカメラをセットして、さまざまな角度や遠近からの映像の切り替えを頻繁にやる。一分もやりつづけければ文字通りの「大相撲」となるようなこの激しい闘いである。ある特定点からじつくりと闘いの姿をみてみたい。二人の力士の力の入れどころの変化や技の切り替えなどを細切れにしてしまうと、肝心のその変化や切り替えの瞬時の印象が薄くなってしまふ。あんなに狭い円形の空間で二人の男が激しくぶつかり合うのだから、そのぶつかり合いをそのままに放映してくれないものだろうか。

試合における審判の判定にビデオを利用することには私は大賛成である。大相撲には行司の判定に対する「物言い」があり、テニスでは審判の判定に対し異議を申し立て、ビデオ判定を求める権利が選手に認められている。そうしたことは競技判定の公正性を高め、競技の質の向上に必ずや繋がると思う。サッカーやラグビーでもビデオ判定が導入されつつある。こういう使い方を促すことにもっと心を砕いてほしいものである。